

クリシエ

●登場人物

妹

姉

男

執事

男1

男2

ステイプ

ジョー・ギリス（ステイプを演じる者が兼ねてもよい）

桜子

ステージ。金髪のジェーン人形が、『パパへの手紙』を歌う。歌い終わると盛大な拍手。いつしかジェーンの両親と姉が立っている。三人の存在は影のようだ。

父 ブラボー、ジェーン。今日のおまえも最高だったよ。さあ、ホテルに戻ろう。

ジェーン人形 あのホテルはキレイ。

父 楽屋口はファンのみなさんでいっぱいだ。愛想よく笑顔をふりまくんだよ。

ジェーン人形 ホテルを変えて。

父 どこもいっぱいなんだよ。おまえを見にみんな国中からやって来たんだ。

ジェーン人形 じゃあ戻る前にアイスクリーム買って。いいでしょ？ あたしのお金よ。

母 (たしなめて) ジェーン。

ジェーン人形 ねえ、お姉ちゃんもアイスクリーム食べたいわよね。

姉 ……。

ジェーン人形 ねえアイスクリーム買って、ストロベリーのおっきいの。

父 わかったわかったよ。ブランチ、おまえはどうする？ はっきりしろ、いるのか、い

らないのか？

……。

もつと笑顔でいるんだよ。まったく陰気臭い娘だ。

しくしくしく。

泣くんじゃないの、泣くんじゃないのよランチ。いつかきつとあなたが注目される

日が来るから。(抱き締める)

(姉と母に) さあさあ、お客様の前、お客様の前だぞ。笑顔をふりまいて！

人々の歓声と拍手が起こる。家族はそれに応える。

## 2

カラスの鳴き声がする。男が立っている。胸には短刀が刺さっている。

男  
死んでいます……。一突きでやってくればいいものを心臓を少しばかり逸れたので、  
痛い痛くないのって。三十六年間の人生が映画の予告編のように駆け巡って、最後  
に見た光景は天井に吊るされたほりだらけのシャンデリア。でもいったん諦めると

痛みはすつと引いて……生きようと思うから苦しいんですね。今はもう体も軽くなつて元気一杯。

初めまして。私、元気な死体です。棺桶にはまだ早過ぎる。こうなつたいきさつを語りましょう。私がこの屋敷に足を踏み入れたのは一月前。燃え上がる緑の季節、新種のメランコリーが皮膚の裏側から芽吹き始める五月。私の職業ですか？ さ迷える劇作家と申します。友達は書き上がらなかつた物語。恋人は夜の彼方に飛び散つた台詞の数々。夕暮れをながめて立ち去つた人々を想い、倉庫番のバイトを失い、居場所を求めてこの屋敷の門までやって来ました。街の噂では怪しげな大邸宅と聞いていたので、『サイコ』か『犬神家の一族』を想像しましたが、路地の突き当たりに構えられた女優の館は、鬱蒼とした樹木に囲まれた和洋折衷の一軒家。門の向こうからは、どこかなつかしい香りがして……そう。ずっと忘れたまま閉じ込めてしまつていた香り。それに心を鷲掴みにされて、ふらふらと……（胸の短刀を抜き）虹の橋俳優養成所はこちらでしょうか？

屋敷の居間が露わになる。和洋が混ざつた古めかしい調度品。たくさんの写真立て。テーブル。ソファ。椅子。衝立。襖があつてもいいかも知れない。天井にはシャンデリアが吊るされている。全身を映せる姿見があり、それは楽屋の姿見よろしく様々な色の電

球で囲まれ、鏡面は布で隠されている。そして大きな人形ボックスのような棺桶が立っている。二階につながるらしい階段があるが、上がった向こうは真っ暗の闇で先に部屋があるのかどうかわからない。

顔中に包帯を巻いた妹が座っている。傍らに執事。男はそのまま立っている。

妹 声がしなかった？

執事 は？

妹 今、外で声がしなかったかしら？

執事 動かないで。

妹 あたしに指図はやめてね。

執事 しばらくじっとしているようにとお医者様が。

妹 しばらくってどれくらい。

執事 残りの人生とおっしゃってました。

妹 あのクリニックにはもう行かないわ。

執事 当分お酒も控えるようにとおっしゃってました。

妹 まっ。生意気ね。

男 あの……

執事 誰だ？

男 チラシを見て……

執事 どうやって入った？

男 鍵がかかってなかったので……

執事 勝手に入って来ていいと思うのか。

男 すいません。

妹 誰が鍵をかけたのよ？

執事 申し訳ございません。わたくしです。

妹 そのプロマイドとペンを取って。

執事、プロマイドとペンを持って来て妹に渡す。妹、プロマイドにサインをして、男に差し出し、

妹 さつ、これで帰ってちょうだい。

男 (受け取ったプロマイドをじっと見る) ベイビー・ジェーン……

執事 出口はあちらです。

男 天才子役スター、ベイビー・ジェーン・スギハラ。(顔を上げ、妹に) 本人ですか？

妹 はあ？

執事 失礼だぞ。

男 (暗唱しているかのよう)「いい子のアイドル、ベイビー・ジェーン。みんなベイビー

ー・ジェーンが大好き。ジェーン人形を買ってみんないい子になりましょう」

妹 よろしい。

男 もうとつくに亡くなっていると思っていました。

執事 !

妹 追い出して。

執事 さあ、出た出た。

男 前にあなたをモデルにした劇を書いたことがあります。

妹 劇を書いた？

男 伝説の子役シリーズって枠組みで。

執事 さあさあ、出た出た。

妹 ちょっと待って。包帯を取ってちょうだい。

執事 しかしお医者様が……

妹 いいから取るんだよ。



執事、包帯を外していく。

妹 確かめてごらんなさいな。死人かどうか。

感激だ。こんなところで子役界のレジエントに会えるなんて。

執事 ぶざけたことを。子役界なんて世界はない。先生は立派な女優だぞ。  
妹 人より少しばかり早く早く人生を生き過ぎたのよ。それだけのこと。

妹の顔が露わになる。

妹 いかがかしら？

……。

妹 その沈黙は何？

執事 この男、先生の美貌に驚き、言葉をなくしております。そうだろ？  
男 え？

執事 言葉を発しなさい。

妹 いかがかしら？ あたし。

男 ……変わっていません。

妹

どんなふうに変わってないの？

男

つぶらな瞳。愛くるしい口元。ベイビー・ジーンそのままです。

妹

ありがとう。(急にきつとなって)この男をとつと追いつ出して。

執事

かしこまりました。

男

なぜです？ ぼくはここに……

執事、男の腕を掴んで出て行く。妹は姿見の布に手をかけるが、やめてウイスキーのボ

トルを取り出し、ショットグラスで飲み干す。

妹

この世で許せないのは、あからさまなおべんちゃらと人を虚仮こけにした皮肉。あらやだ。何を言われても頭にくるってことじゃない。

姉が階段から下りて来る。片足が不自由らしく一本の補助器具を使っている。

姉

(階段を下りながら大女優の風情で)今日もまた晴れた陰気な日ね。雨でも降ればいいのに。ずっと降り続ければいいのに。そうすれば人々はみんな陰気になって私は人と同じでいられる。

姉 妹  
あら、ごきげんね。

旅立ちの日は雨がいい。誰にも見送られず、気づかれず列車に乗るの。雨季に入った南行きの列車に。

妹  
どこかで聞いたことがあるわ。

姉  
さあ、南へ。

妹  
舞台の台詞じゃない。

姉  
明日になれば。明日になればね。

妹  
少しは自分の言葉でしゃべってよ。

姉  
だんだん言葉が消えていくのよ。出てくるのは昔覚えた台詞ばかり。

妹  
自分の出てるビデオばかり見るからじゃないの？

姉  
音がしたけれど、何かあったの？

妹  
あたしのファンがおしかけてきたのよ。

姉  
あら、よかったじゃない。

妹  
熱狂的なファンでね、なかなか帰らなくて。

姉  
ジェーン、あなた、お酒飲んだわね？

妹  
いいえ。

姉  
息が匂うわ。



姉 とにかくが好きな人よ、あなたは。

姉 とにかくお酒はやめてちょうだい。一度はやめられたんだから、我慢して。

姉 人の指図は受けないわ。

姉 お酒を飲み過ぎると、汚れた感情が溜まっていくから。

姉 何よ、汚れた感情って？

姉 言わなくたってわかるでしょう？

姉 何よ、エラソーに。ブス。

姉 それが汚れた感情よ。

姉 ブス、ブス、ブス、ブス！

姉 わかったから手を貸して。私をそこに運んでちょうだい。

姉 ひとりじゃ何もできないんですからね。

姉 わかっているわ。

姉 わかっているの？ あなたの世話であたしはいくつもの役を棒に振ったんだから。

姉 感謝してるわ。

姉、棺桶の蓋を開けて、姉が棺桶に入るのを助ける。立った棺桶に姉が立ったまま入っ

た格好になる。姉、出て行くこうとする。

姉

どこに行くの？

妹

街でお買い物よ。

姉

勝手に銀行からお金をおろすのはやめてね。

妹

自分のをどうしようが勝手じゃない。

姉

私とあなた、ふたりのお金よ。

妹

あたしだよ。この家だってあたしのお金で買ったんじゃない。

姉

でも今あるお金は、ふたりのものよ。

妹

あたしはベイビー・ジェーンよ。(たかさんの手紙を出して来て) ほら、今でもこんな

姉

にたかさんのファンレター。みんな、あたしのことには忘れないって。

妹

ジェーン、うちはもうけっこう大変なの。お金を勝手におろさないでね。

姉

うるさいわね。

妹

とにかく……

妹、棺桶の蓋を閉める。

姉

(なかから) ありがとう。

妹 ……。(出て行く)

3

男

街に戻って今一度ベイビー・ジェーンを調べ直しました。一世を風靡した天才子役の人気はいつしか衰えて、入れ替わるようにスターの階段を駆け上がったのは姉のブランチ。ブランチは舞台、映画で活躍して女優として一時代を築いたが、事故の後遺症で表舞台から姿を消した。姉妹ふたりで出席したパーティの帰り、酔っ払ったジェーンの運転する車が屋敷の鉄門に衝突して大破。ジェーンは無事だったが、ブランチは重傷。とまあこういうことになっているのだが、目撃者がいないこの事故はどこか謎めいている。

虹の橋俳優養成所は十年ほど前に始められて、最近になって劇作家の募集を始めました。同期の劇作家ステイブに、顔を出してみないかと誘われていましたが、私にはまだプライドがあった。養成所に向かったステイブはその後行方不明です。劇作を諦めて田舎にひっこんだとか、ひとやま当ててフロリダに飛んだとかいう噂がまことしやかに流れていました。

屋敷を追い出された私は、珍しくすぐには諦めませんでした。姉妹の謎が、くすぶっ

ていた劇作家魂を駆り立てたのです。

数日後。屋敷の居間。姉がソファに腰掛けてテレビモニターから流れるDVDを見ている。正面を向いて顔にモニターの光が反映して画像は見えず、音声だけが聞こえる。姉は満足そうに微笑んで見入っている。男がひっそり入ってくる。

男 あのと、お邪魔します。

姉 どなた？

男 玄関の鍵が開いたままでしたので。

姉 (画像に夢中で) あら、それはそれは。

男 入所を希望したいのですが。

姉 あら、そうなの。

男 スギハラさん、ですね？

姉 ブランチと呼んでくださいいな。

男 あのこと……

姉 こちらに来てご覧になれば。

男 よろしいですか？



姉  
どうぞ。

男は近づいて背後からテレビモニターを見る。

男  
ウィリアム・インゲの劇ですね。

姉  
ええ。

男  
おきれいですね。

姉  
二十四歳よ、私。

男  
二十四歳とは思えない深い演技です。

姉  
そうね。たいしたものだわ。

男  
このシーン、ぼく好きです。

姉  
私もよ。(不意に笑う)

男  
おかしいシーンですかね。

姉  
(笑いつつ)あなた、これがおかしくくないの？

男  
そう言われるとおかしいな。

姉  
おかしいじゃないの。(笑っているが不意に泣き始める)悲しくておかしい。おかしくて悲しいの。それが人生。(男を見て)あなたはまだ若いからわからないのよ。

男  
はあ。

妹がライフル銃を構えて入ってくる。黒のアイパッチという出で立ち。妹、テレビのス  
イッチをオフにする。

妹  
不法侵入者。(男に銃口を向ける)

男  
(両腕を上げる)

姉  
変なコスプレはおやめなさい。

妹  
マーロン・ブランドよ。

姉  
ハロウィーンはまだ先よ。

妹  
(男が腕を下げようとするのを) おら。

男  
(両腕を上げる)

姉  
入所希望者よ。

妹  
入所希望者? 入りたいの?

男  
お願いします。

姉  
将来有望な青年よ。

妹  
いくつ?

男 三十六です。

妹 遅過ぎるわ。

姉 あら、そんなことなくってよ。

妹 あたしみたいに子供の頃からやってないと駄目。

姉 人それぞれよ。

妹 あなた誰か紹介者はいるの？

男 いません。

妹 親戚にシヨーズ関係者がいるとかは？

男 まったくありません。

妹 帰ってちょうだいね。

男 劇作家募集のチラシを見てやって来ました。

妹 (ライフル銃を下ろし) あなた、劇作家？

男 ええ。俳優志望ではなくて。

妹 早く言ってよお。

男 このあいだ来た時に……

妹 このあいだ来た？

男 はい。

妹 嘘おつしゃい。あなたここ初めてでしょ？

いえ……

妹 初めてでしょ？

姉 「はい」と言つとけばいいのよ。

妹 なによ、その言い草。

姉 はいはい、あなたがただしゅうございます。

男 劇を書かせてください。おふたりを主演にしたストーリーをいろいろ考えました。

妹 おふたりい？!

男 二大女優共演です。

妹 (姉を指し) このひとにはできませんよ。こんな体なんですから。

男 今のままで出られる設定で。

姉 まあ。

妹 あたし嫌よ、舞台の上でもこのひとの世話するの。このひとは無理です。あたしのことだけを考えてくれればいいんです。

男 しかし……

姉 いいのよ。私はもう舞台上上がる気はないわ。

妹 (男に) そういうことよ。

男1、男2がいる。男2は腹話術の人形のメイク、南海の王子ボンの衣装を着て男1の膝の上に乗っている。腹話術師と人形を演じるふたりをジェーン人形が椅子に座って眺めている。男が陰からこの光景を見ている。

男1 やあボンちゃん、元気かい。

男2 (人形の声色で) 元気なわけねえだろ。

男1 おやおや、こりゃごあいさつだなあ。不機嫌はいけないよ。みんなボンちゃんを見に来てくれたんだからね。さあみなさんにごあいさつして。

男2 南海の王子ボンだ。おれを見に来るなんてよっぽどの暇人だな。

男1 おやおや、そんな態度はいけないよ。君はスターさんなんだから。

男2 スターなんだからなに言ってもいいんだ。

男1 スターに必要なのは気遣いだよ。

男2 気遣いだと?!

男1 ああ。それがなくてぼくは駄目になったんだ。

男2 そいつは気の毒だったな。

男1 今日ボンちゃんに話してもらいたいことはスターさんの実生活についてなんだ。

男2 知らねえよ、そんなもん。

男1 そんなこと言わないで。君は誰もが羨む人気者なんだから。

男2 みんな忘れちまつてるよ。

男1 そんなことはない。今でもファンレターが届くだろう？ さ、みなさんにスターの生活を語っておくれよ。

男2 自分でしゃべれよ。

男1 ほくはボンちゃんじゃない。

男2 じゃあ、おまえは誰なんだ？

男1 ほくは……

男2 ボンだろっ。

ほくはボンじゃない。君は有名だけど、ほくのことなんか誰も知らない。

男2 おまえは大人になったボンだろっ。

男1 大人になったボンなんていないんだよ。

男2 それじゃあボンはどこにいるんだよ。

男1 だから君がボンなんだよ。

男2 本当のボンはおまえだ。おれの言葉はおれのものじゃない。おまえが黙れば、おれはしゃべれない。

男1 開き直ったな。

男2 おまえがいなけりゃ、おれはいないんだ。

男1 それは違うよ、ボンちゃん。大切なのはいつだって君のほうなんだ。さ、語っておくれよ、栄光の人生を。

男2 自分でしゃべれよ。

男1 そうか。君がそこまで言うのならふたりで黙ってしよう。

ふたり、しばし黙る。

男1 どうしても話さない気なんだね。

男2 ああ。

男1 わかったよ。もう頼まないよ。

男2 どうしようってんだ？

男1 ひとりで生きていくさ。

男2 できるのかね？

男1 困るのは君のほうだぞ。

男2 どうだかねえ。

男1、男2を置いて離れる。

男1 (何かをしゃべろうとするが無理だ)

男2 やっぱりな。

男1 (何かをしゃべろうとするが無理だ)

男2 おれはもともと人形だからしゃべらなくても困らない。困らないから、そら、かえってしゃべれるぞ。精神的余裕ってやつだ。

男1 (何かをしゃべろうとするが無理だ)

男2 怒らないから戻って来いよ。

男1 (椅子に戻って) すみませんでした。

男2 わかったか？ おれがいなけりゃ、おまえはいないんだ。

男1 では、ボンちゃん、今日はスターさんの実生活についてしゃべってくれないかなあ。

男2 自分で語りなさい。

男1 わかりました。こんちわー、南海の王子ボンです。ぼくがどうして落ちぶれていった



## あとがき

「ハイ、みなさん、こんばんは。今日の映画はコワイです、コワイですねえ。どうかお子様は寝てくださいね……」

『クリシエ』は1994年、第三エロチカの製作によって渋谷のシードホール（すでに閉館）で上演された。この劇のストーリーは1962年に製作されたアメリカ映画『何がジェーンに起こったか?』に依っている。

この映画を小学生の頃、日曜洋画劇場で見た。冒頭の台詞は放映前の淀川長治氏の解説からである。普段の解説でもコワイを連発する淀川氏自体がいつもコワイのだが、独特のイントネーションで、どこか人形を思わせる肌合いに覆われた無表情がその夜はいつにまして真剣に怖かった。本当に怖い映画なのだろうと見る前から早くもおじけたが、がんばって見たのであった。見ている間は何度も恐怖に戦慄し、その晩は布団に入っても寝付けず、トイレに行こうと居間の暗がりに踏み出すと、ソファの後ろあたりに白塗りのジェーン・ハドソンが佇んでいる気がして走り抜けたのだった。

多くの子供のご多分にもれず、英米生まれのモンスター、フランケンシュタインの怪物、ドラキュラ、狼男、ミイラを好み、日本産では『妖怪百物語』、『大魔神』、『サンダ対ガイラ』といった映画で主役を張る怪物、化け物たちをアイドルと見なす子供だったが、『何がジェーンに起こったか?』を見た頃は、怪物、化け物の恐怖とは異質の大人の恐怖映画ともいふべきフィルムの存在を知り始めていた時期だった。

それらは怪物、化け物たちより掛け値なしに怖かった。

少年期、脳内に刻印された大人の恐怖映画をさらに挙げるとアルフレッド・ヒッチコックの『鳥』、ジョルジュ・フランジュの『顔のない眼』、中川信夫の『東海道四谷怪談』がある。

こうした少年期を前説として、1989年、第三エロチカ時代へと一気に時を飛ばす。未来社から上梓された『グラン・ギニョル 恐怖の劇場』（フランソワ・リヴィエール、ガブリエル・ヴィトコフ著。梁木靖弘訳）をたまたま手にして、19世紀後半のパリで流行っていたグラン・ギニョルなる大衆向け娯楽恐怖劇の存在を知り、大いに興味を持った。訳者のあとがきには、グラン・ギニョルのテイストに似たものとして『顔のない眼』が取り上げられていたり、『東海道四谷怪談』も言及されていて、これは自分が取り組まなければならないものだと感じた。

グラン・ギニョル、すなわち大きな人形。

この言葉に触れて呼び起こされたイメージは、ハンス・ベルメールの人形であり、シウルレアリスムの観念のビジュアル化の数々であり、どこぞの路地の暗がりですぐに遂行される猟奇殺人であり、同時に幼少期に触れたことのある見世物小屋の埃っぽい喧噪だった。

こうして〈ネオ・グランニギニョル三部作〉と銘打ったシリーズの骨子が練り上げられていった。とはいうものの本家のグランニギニョルに関する資料の類いは上梓されたばかりの『グランニギニョル恐怖の劇場』以外にはほとんど見つからず、もちろんグランニギニョル劇の翻訳もされてはいなかった。今のようにネット、ウェブサイトを活用する時代ではなく、戯曲翻訳は2010年、『グランニギニョル傑作選』（真野倫平訳・水声社）まで待たなければならなかった。もし、三部作を画策している時点でこの翻訳本が出版されていたとしたら、それらをコラージュした台本、もしくは換骨奪胎で新たな恐怖劇を構想していたかも知れない。

とにかく、集められる情報はある限り手元に置こうと、プロデューサーの中根公夫氏がパリ遊学中に入手したながしをかを持っているという噂を聞きつけ、氏に聞くと持っていると言うので、それでは見せていただきたいと、グランニギニョル座の当時のポスターなどのビジュアル類の出版物のコピーをもらい、それらからながしかを引き出そうと、深夜長時間眺める日々を送るうちに、閃いたのは少年時に刻印された恐怖映画の換骨奪胎だった。『グランニギニョル恐怖の劇場』の記者梁木氏が、

## 上演記録

●公演日時 2020年1月29日～2月2日 あうるすぽっと

### ●CAST

妹：川村 毅

姉：加納幸和

男：鈴木裕樹

執事：笠木 誠

男1：秋葉陽司

男2：松原綾央

スティーブ／ジョー・ギリス／父：伊東 潤

桜子／声／母：高木珠里

### ●STAFF

演出：川村 毅

照明：浜野洋平（ファットオフィス）

音響：原島正治

衣裳：伊藤かよみ

ヘアメイク：川村和枝

人形製作：高橋竜男（エコール・ド・シモン）

演出助手：小松主税

舞台監督：小笠原幹夫

製作：平井佳子

主催：株式会社ティーファクトリー／あうるすぽっと（公益財団法人  
としま未来文化財団）／豊島区

川村 毅（かわむら・たけし）

劇作家、演出家、ティーファクトリー主宰。

1959年東京に生まれ横浜に育つ。

1980年明治大学政治経済学部在学中に第三エロチカを旗揚げ。86年『新宿八大伝 第一巻』にて岸田國士戯曲賞を受賞。

2010年30周年の機に『新宿八大伝 第五巻』 完結篇を発表、全巻を収めた [完本] を出版し、第三エロチカを解散。

以降3年間、新作演出による舞台創りを控え、P.P. パゾリーニ戯曲集全6作品を構成・演出、日本初演する連作を完了。

2014年リスタートと位置づけた新作演出舞台の創造を吉祥寺シアターと共に開始。

2014年『生きると生きないのあいだ』15年『ドラマ・ドクター』16年『愛情の内乱』、この三作品を収めた「川村毅戯曲集2014-2016」を論創社より刊行。

〈自身の原点を再考する〉新作として2017年『エフェメラル・エレメンツ』（「エフェメラル・エレメンツ／ニッポン・ウォーズ」論創社刊）、2018年『レディ・オルガの人生』、2019年『ノート』（「ノート／わらの心臓」論創社刊）が続く。

2013年『4』にて鶴屋南北戯曲賞、文化庁芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2002年に創立したプロデュースカンパニー、ティーファクトリーを活動拠点としている。戯曲集、小説ほか著書多数。<http://www.tfactory.jp/>

●本戯曲の使用・上演を希望される場合は下記へご連絡ください

株式会社ティーファクトリー

東京都新宿区西新宿 3-5-12-405

<http://www.tfactory.jp/> info@tfactory.jp

## クリシェ 【CLICHÉ】

---

2020年1月20日 初版第1刷印刷

2020年1月29日 初版第1刷発行

著 者 川村 毅

発行者 森下紀夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03 (3264) 5254 振替口座 00160-1-155266

装丁 町口覚+浅田農 (マッチアンドカンパニー)

組版 フレックスアート

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1904-4 ©2020 Takeshi Kawamura, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします